

15 1995-17



一九九五年は、戦後五十年の年だ。同時に、七〇年を分水嶺（わかぎり）として開始された、高度消費社会、情報化社会の二十五年目になる。日本の戦後は、回覧でめぐられる五十年と、新しい質をもつて開始された「戦後・後」二十五年をもち複合社会なのである。

九五年は、この五十年と、二十五年を両にらみながら、新しい時代の課題への挑戦が始まる年である。

現代思想

新局面を担う三人の思考者

ある。そこで、この新局面を担うと見られる三人の思考者たちを紹介しよう。

一人は、いわずとされた吉本隆明である。七十歳、戦後史の全部を、そのときどきの最も重要な課題に答えながら、文字でお

り、一人駆けつけてきた。吉本の思考スタイルは、常に「現在」の課題に答えを出してきた。

しかも、その語られた「現在」をうかがって見ると、見事な戦後五十年史と、戦後・後二十五年史が生まれ上るのである。これは神業

この指標をベースに、吉本は、政治・経済・文化の大通りばかりでなく、サブカルチャーまでも分折の相上（さじょう）に載せるのである。

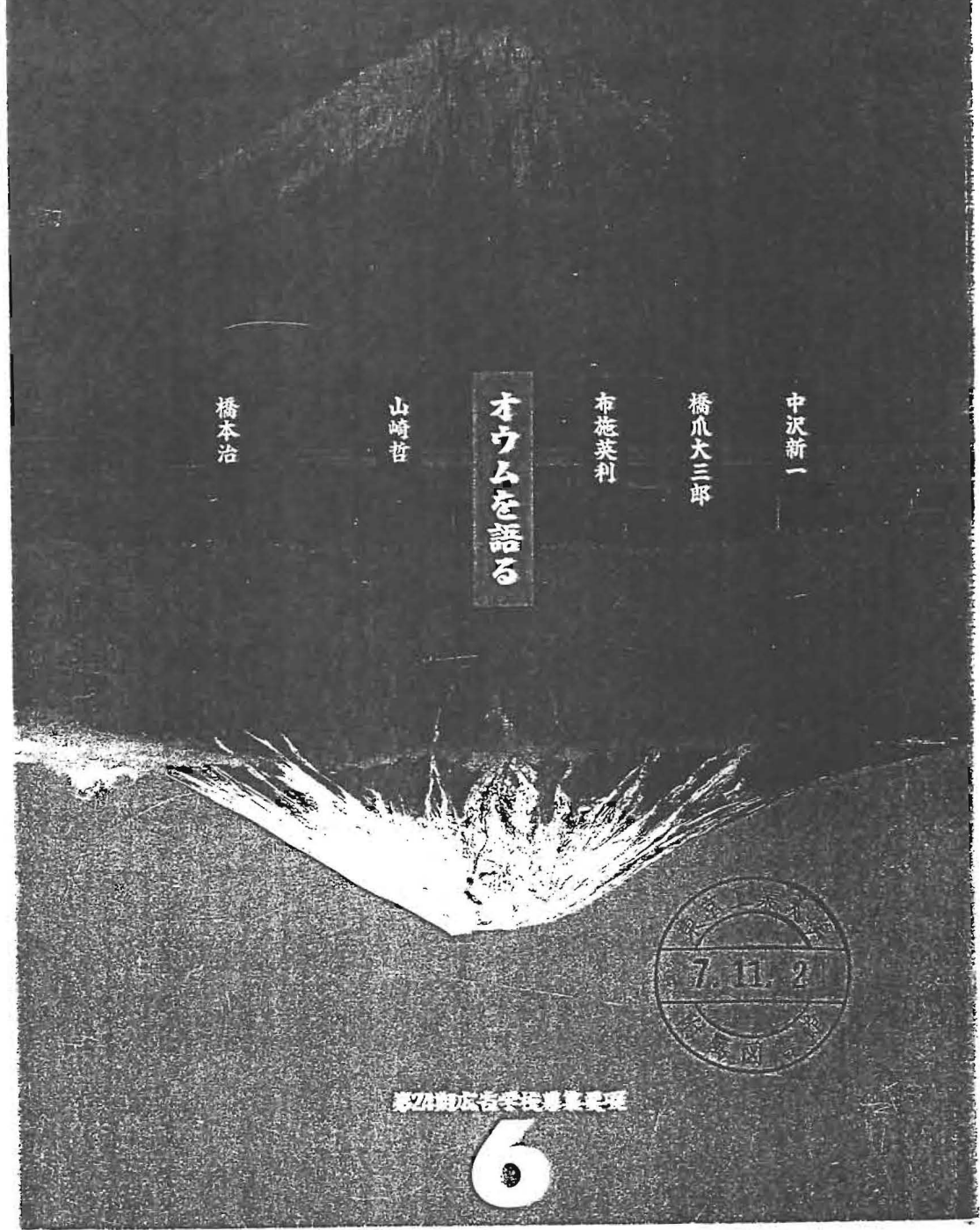
吉本はこれからこそが本番だ、とこの指標をベースに、吉本は、政治・経済・文化の大通りばかりでなく、サブカルチャーまでも分折の相上（さじょう）に載せるのである。

この指標をベースに、吉本は、政治・経済・文化の大通りばかりでなく、サブカルチャーまでも分折の相上（さじょう）に載せるのである。

吉本はこれからこそが本番だ、とこの指標をベースに、吉本は、政治・経済・文化の大通りばかりでなく、サブカルチャーまでも分折の相上（さじょう）に載せるのである。

吉本はこれからこそが本番だ、とこの指標をベースに、吉本は、政治・経済・文化の大通りばかりでなく、サブカルチャーまでも分折の相上（さじょう）に載せるのである。

広告批評



中沢新一

橋爪大三郎

布惣英利

オウムを語る

山崎哲

橋本治



東京新聞広告学校専攻委員

6

オウム事件とは何だったのか

中沢新一 宗教学者

橋爪大三郎 社会学者

布施英利 批評作家

山崎哲 劇作家



中沢新一氏



橋爪大三郎氏



山崎哲氏



布施英利氏

サリン事件の恐怖 はどこから来たか

編集部 麻原氏が逮捕されて、そろそろ「オウム」事件というか「オウム」現象について、そのよってきたる意味を探ろうとする動きが出てきているようですが、私たちが少し冷静に、史上稀にみるこの事件が投げかけている問題を考えてみたいと思います。「何がオウムを生んだのか」「現代において『救済』とはなんなのか」というあたりから、お話をすすめていただければと思います。
布施 僕はいままでオウム真理教に関して直接取材した

ことがありませんし、持っている情報も基本的にはテレビや新聞で報道されたことに尽きるので、本来はここでわざわざ発言するほどの立場の人間ではないんですが、ただ今回の事件は、単なる宗教の問題を超えて、僕たちにも関係のある問題をおおいにはらんでいると思うんです。
一つは、やはり現実とシミュレーションの問題ですね。文明が進み堅固な社会体制ができあがっていくと、すべてはシミュレーション、実体的なものになっていってしま

う、とはよく言われることですが、オウムの場合もまさに
そうです。彼らの世界は、まず頭の中にあつた。人間は確
たる現実がなくても、そんな想像の世界だけで耐えられる
んだらうかという点にすごく興味があつたんですが、彼ら
の行動を見ている限り、頭の中のシミュレーションはシミ
ュレーションのままでは耐えきれずに現実化してしまつた。
やっぱ人間というものは話だけでは終われない、現実に
戻ってきてしまうものなんだということを、あらためて教
えられた気がします。

それと、僕はいわゆるオウムの幹部と言われる人たちと
世代的に近いんですが、とんでもないと思う部分もある代
わりに、ある部分では共感することがないこともない。そ
れは社会の現状に対する不満で、彼らに対してはよく、豊
かな環境で育つて、学歴社会を勝ち抜いたエリートで、い
つたいどんな不満があるんだというような言い方がされま
す。しかし、どう考えても彼らにとつていまが幸せな世の
中とは思えない。

僕の場合、去年まで東大にいて、はたから見ればこんな
にいい立場はないんじゃないかと思われていたかもしれない
けれど、自分としてはけつして居心地がいいとは言えな
かつた。その理由は、なにか大きな被害をこうむるとか叩
かれるということではなしに、もつと目に見えないディテ
ール、例えば押したハンコが一ミリ枠からはみ出している
から、この書類は最初から書き直してくださいというよう
なことを、実際に言われるわけです。それは相手も別に意
地悪なわけではなくて、そういうやり方でお役所の仕事と
いうものが成り立ってしまっている。そんなことくらいい
ちいち文句を言わずに我慢しろと言われるかもしれないけ

にはヨガを通じて身体から内面を変えていく技術があつた
わけで、からだとの関係をまず変革しなければ、オルタ
ナティブな集団もできないし社会の形成もできないだろう
というのが、僕が最初の段階で理解していたオウム真理教
の理念だつたし、おそらく麻原彰晃もそういうスタンスで
自分たちを捉えていた。それがなぜ内部に疑似国家的な組
織を作り、オルタナティブであるはずのものが日本国家の
合わせ鏡のような存在に変容し、対決する過程にいたつた
のか。それはいまだに、僕らには謎です。

それからもう一つ、彼らが声高に主張する「謀略」や
「陰謀」というものを、単純に幼稚なナンセンスとして片
づけることはできないんじゃないかと思うんです。米軍が
毒ガスを撒いたという彼らの主張は別にして、世界に陰謀
や謀略というものは実在する、そしてそれは大きな意味を
持っているんだ、日本人はそれについてナイーブすぎるん
だということを、今回の事件が白日のもとにさらした側面
は無視できない。

この世界はなにかの陰謀や謀略によって操られている、
それと自分たちは戦うんだという歴史観を、彼らはかなり
露骨に出したわけですが、この考え方はある意味で左翼の
歴史観と似ているんですね。左翼も麻原彰晃ほど鋭き出し
にはしなかつたとはいえ、陰謀史観を背景に持っていた。
だからこそ、陰謀や謀略というものをいつの段階から彼ら
が強烈に意識しだし、疑似国家を形成するにいたつたのか
僕らは自分自身にも内在する問題として、きつちり捉えて
いかなくてはならないんじゃないか。オウム真理教を単に
カルト集団だとか反国家的な狂気の集団だとか、疑似国家
を作つて麻原彰晃が天皇の地位につこうとしていたとか、



れど、でも、そういった細かいことにひたすら我慢し続け
ていくことが、本当にいい世の中と言えるんだらうかとい
う疑問は、僕の中にも生まれてきた。そういう意味で、現
状に対するある種の「NO」を表明したいという気分には、
共感するところがあるんですね。

中沢 サリンを撒くという、ぶつとんだ行為において
も？

布施 行為に共感するかどうかは、また別の問題です。
当然、サリンには共感しません。それとオウム真理教に関
して僕がいやだなと思うのは、さっきのハンコの例にして
も、あれは人間が集団になり、その集団が大きくなること
で派生してくる現象であるわけですが、そんな社会がいや
だと言つて飛び出して別の集団を作つても、それはある集
団から別の集団に移つたというだけであつて、実は何も変
わらないんじゃないか、既成の国家に対抗してもう一つの
国家を作つても、それはなんら抵抗の意味がないんじゃない
かと思うからなんです。

中沢 僕はオウム真理教を、まだオウム神仙の会と名乗
つていた八七年ごろから知っていますんですが、当時の麻原
彰晃に疑似国家を作ろうという意志はなかつたように思
います。村井秀夫さんがカモメのジョンナサンになるんだつて
言つて出家したのを見てもわかるように、彼らの中にそう
した発想はなかつたんじゃないか。むしろ、国家的なるも
のとはまったく違うものを自分たちの内部に作ろうとした
というのが、初期の麻原彰晃および弟子たちの心理だつた
んじゃないでしょうか。

弟子たちがなぜ他の新興宗教ではなくオウムを選んだか
という、やはり身体技術があつたからでしょう。オウム
という側面だけで叩いてしまつては、僕らが八〇年代か
ら九〇年代にかけて体験してきた思想的なプロセスを、全
部踏み落としてしまうことになるんじゃないかと思うん
です。

だから、僕はオウム真理教はカルトとして規定してはい
けないと思うし、疑似国家形成の問題も一つのプロセスと
して捉えていかなくてはいけないと考えている。なぜそう
したものが発生しえたのか。そこには麻原個人の問題もあ
れば、社会との対応の問題もあるだろう。そうした一切を
視野に入れた全体で捉えない限り、オルタナティブとして
始まつたはずのものが、どうしてああいふ国家に反する国
家を形成したのか、本当の意味で解明することにはならな
いんですね。そして、何度も言うけれど、これは僕らに内
在する問題とも深くつながっている。僕らは、公安じゃな
いんだから、広がりのある視点から、これを思想の問題と
しても取り扱うべきだと思ふ。

布施 連合赤軍の事件が連続して起きていたころ僕は小
学生で、浅間山荘を見物に行った記憶があります。あれに
しても、最初は世の中をよくするために革命を起こそうと
いうつもりで始まつたことが、いつのまにか仲間同士で敵
視し始めたり、違う方向に進んでいってしまった。オウムの
疑似国家化にしても、そこにはやはり人間が強力な集団
になることによつて生まれてきてしまう、個人を超えた力
が働いていたんじゃないか、と思うんですが。

橋爪 今日私は私は、まったくの体制派として、これは明
らかな刑事事件であるというスタンスで発言するしかない
と思つています。というのは、それが一番明確な関わり方
だから。人びとがオウム真理教に興味を持ったのは、彼ら



が犯罪を犯した可能性があり、その犯罪が巨大であることに、衝撃を受けたからですね。もちろんその集団がいかなる論理に従っているかを内在的に理解しなければ犯罪の再発も防止できないわけで、そのことも十分理解していくべきだとは思いますが、私としてはあくまで、彼らがサリンを撒いたりするような、反社会的な行動をとらなくてはならないような必然性を持った集団だったのかどうかという関心から出発したい。

中沢 ただ、そうなる、いま警察が踏みこんでいるレベルではどうしても解けない問題が出てきますね。それはどうするんですか。

橋爪 それについては解かなくてもいい。刑法には構成要件というものがあって、犯罪を構成する動機そのものも含めて、それに当てはまれば有罪であり、当てはまらなければ無罪になる。そうしたルールで裁判を進めていくための、いまはやっと出発点まで来たところでしょう。

山崎 ただ、僕の考えでは、サリンの恐怖は犯罪の恐怖ではないと思うんです。つまり、これだけサリンに対して僕らが恐怖したのは、無差別に大量に殺戮するという点で、犯罪を超えてしまったからなんじゃないだろうか。僕らは同じ街に住んだり道ですれ違ったりしても、これまでは同じ日本人同士だという点で、無意識の信頼感があったと思うんです。つまり、いきなりわけもなく日本人によって殺されるはずはないと思ってた。「朝まで生テレビ」に出たときに、田原総一朗さんは「全共闘の世代から日本人は日本人を殺したじゃないか」と言っていて、それは反日武装戦線のことをさしていたわけですが、あれは基本的にそういうものとは違う、彼らにはまだ、日本人に対する信頼が



横たわっていた、その上で日本をなんとかよくしていこうという発想が成り立っていた。そういった日本人による日本という国家のアイデンティティが、今回のサリン事件の登場によって乗り越えられてしまったんですね。だから、サリンの恐怖はそのことに対する恐怖であって、通りすがりに頭のおかしな人が僕らを刺すかもしれないというような恐怖感とはまったく違う。

いままでの新興宗教の教祖のイメージなり幻想というのは、基本的に精神分析的に解けたと思うんです。ところが、麻原さんの場合は、そういう角度では彼の幻想を解くことができない。中沢さんが「カルトではない」とおっしゃったのは、この点でも明らかなんです。あれはカルトよりもっともっと合理的な集団だった。もともと僕らの持っていた日本人としてのアイデンティティなり革命思想なりを超えてしまっているところがあって、それがサリンによって露呈したんですね。

サリン事件を刑事事件にとどめておこうとする視点が感じられるのは、公安事件として国家の側が認めるとまずいからでしょう。治安維持法や騒乱罪を適用すれば、日本の中にも一つ一つの国家が存在したことを、国家の側が認めてしまうことになる。だから、あくまで刑事犯として処理しようとしているわけですが、本質的には違うものだと、僕は思っているんです。

橋爪 おっしゃるように日本人としてのアイデンティティをおびやかされたことによって恐怖を感じた人もいるかもしれませんが、今回はむしろ、日本人というアイデンティティにこだわっていない人も恐怖を感じる性質の事件だと思えますね。テロリズムというのは、犯罪行為そのもの

のではなく、それが恐怖を巻き起こすところに目的がある。行為が終わった時点で目的が達成される普通の犯罪と違って、テロリズムには動機が解明できない、手段が巨大である、無差別であるというようにいくつかの特徴があって、次は自分ではないかと思わせられるところから、恐怖が広がっていくわけですが、サリン事件はまさにこの条件にあてはまっている。

山崎 僕は、恐怖を引き起こすのが彼らの目的だとは理解しなかったんだけど。

橋爪 恐怖を引き起こせば、ハルマゲドンが近いと人びとに思わせられる。そうすれば、オウム真理教に入信しなければならぬと考える人も多くなるだろう。そういう構図が成り立つわけです。

山崎 僕は、彼らが国家の形態をとったのは、破局を実現化していくための過渡期的な発想だったと思うんです。けれど、実際に破局が起きたあとどうするかについて、具体的な構想が麻原さんの中にあっただろうかということ、かなり疑問が残る。そこまでは、おそらく考えていなかったんじゃないかと思うんです。

橋爪 そうでしょう。彼らの主張によれば、ハルマゲドンのあとはオウム真理教の信者しか生き残らないわけで、そこで大乘仏教に基づく文明を再建することになっているとすれば、社会生活全般に関して麻原さんの率いる教団が責任を持たなくてはならないことになる。当然、破局後の展開についても考えていたように思えますが、しきりに自給自足を謳っていたのも、そこにつながってくることでしょう。

山崎 中沢さんがおっしゃったように、僕も初期のオウ



ム真理教は、宗教というよりも道場だった、すぐれた修行の場だったと捉えています。それがなぜハルマゲドンという幻想を持つにいたったか。問題なのは、そのハルマゲドンを現実に移し替えていくときに、政治が入ってきたことなんです。

麻原さんの発言から察する限り、最初はハルマゲドンの原因を米ソの対立に置いていた。冷戦構造が最終的にハルマゲドンに行き着いたとき、それをどうやって乗り越えていくかという第三者的な立場に自分たちを置いていたんですが、現実には米ソ間の対立はなくなってしまったでしょう。そうしたときに、麻原さんはソ連に代わってアメリカ対オウム真理教という当事者としての立場に、自分たちをすべりこませていったんですね。それは同時にソ連に接近する理由にもなったと思いますが、とにかくそこにハルマゲドンを現実化しようとする契機があったように思えてならない。

布施 この事件が大きなインパクトを与えたのは、もちろん日本人のアイデンティティが失われたという側面もあるとは思いますが、はたしてそれだけなんだろうか、という気もするんですね。外国のメディアでもかなり大きく扱われたわけですが、それはいつどこで自分が生命の危険に直面するかもしれない、というショックでもあったように思える。

と同時に、例えばゴールデンウィークの間に交通事故で死んだ人は二百人以上いて、それはサリンで死んだ人よりもはるかに多い。交通戦争のほうがサリンよりも大きな事件だという考え方もできなくはないんですが、それがけっして大きな事件として扱われることがないのはいいいな

ぜなのか。サリンが「大事件」になってしまいう要因を考慮する必要があると思います。

山崎 僕が言いたかったのは、日本人のアイデンティティ、あるいは、日本という国家観を彼らは超えてしまったということだったんです。ハルマゲドンでは世界最終戦争で、そこでは日本人もロシア人もアメリカ人も変わりなく、同じように恐怖に巻き込まれていく。そういう意味では、連合赤軍はあくまで対日本で、日本をけつして超えることはなかった。

橋爪 サリン事件の恐怖は、ある特定の世界観によって歴史が突然書き替えられてしまう、自分の死も含めて世界史がねじ曲げられてしまうことへの恐怖だったとも思うんです。これまでも世界を変えようとする世界観は存在しましたが、マルクス主義にしても長い歴史を経てある程度人びとに読める形で提示されてきた。しかし、オウム真理教というのは、ほとんどの人にまったく知られていなかった世界観であり、一万人規模という並のサイズの団体が本気で準備をすれば、彼らがハルマゲドンと呼ぶような大きな災害を現実を作り出す可能性がある。これは従来とはまったく違ったタイプの犯罪集団が出現可能だということでもあって、日本に限らない普遍的な問題として、世界中が関心を持ったんですね。

中沢 世界最終戦争のビジョンをオウム真理教が出して、こういう世界観があったのかと世の中が驚いたとおっしゃったけれど、ああいうものは八〇年代から雑誌や小説や漫画にはずいぶん登場していて、若い人たちの間ではむしろマルクス主義以上に浸透していたと言ってもいい。からだの技法に関する神秘主義体験への関心も同様ですね。

橋爪 それが常識であつたかどうかは別にして、問題は、

そうしたハルマゲドンまがいの出来事を主体的に作り出す勢力が出てきたかどうかです。待望するのと主体的に作り出すのでは、まったく意味が違う。ただ待っているだけならなら社会的害悪はないわけで、待望していた人たちがなぜ作る側に回ったのか、そこに社会的な問題としての重要なポイントがある。

中沢 それは、つまり、犯罪というレベルにおいてですか。

橋爪 そうです。彼らからすれば犯罪じゃないかもしれませんが、われわれから見れば犯罪ですから。

山崎 僕自身はオウムのやっていることを犯罪だとは思っていない。もちろん、革命は犯罪であるという意味でなら、犯罪だとも言えますが。

橋爪 法治国家であれば、人権を守るために、刑法に違反するようなことは、特定の解除条件が満たされない限り、絶対にやってはいけない。その点に照らして、これは明々白々に犯罪です。

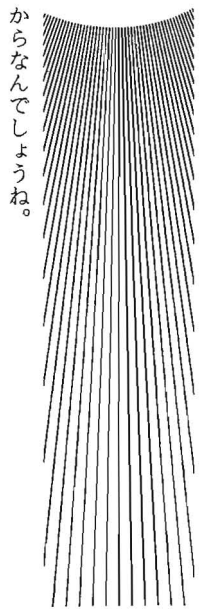
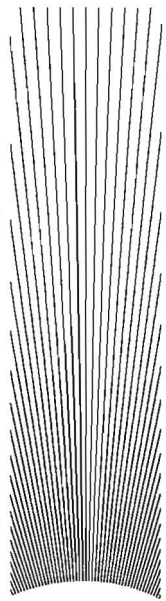
山崎 でも、国家を変えたいという意志はあってもいいわけでしょう。

橋爪 それはかまわないし、現実的な革命行動であればそういう選択の余地もあるけれど、あんなにちやちや勝手な妄想で人を殺して、革命だなんて私は言わせない。

中沢 でも、今度のことが本当にちやちやなことであつたかどうかは、まだわからないじゃないですか。もっと大きな計画の一部だった可能性だってある。

橋爪 だとすれば、それを証明する材料が出てから、あらためて論争しましょう。

フィクションが 現実になるとき



布施 最初は身体理論に重きを置いていた彼らが、ある時期から予言といったものも重視するようになっていった。予言というのは身体理論とはあまり関係がなくて、予言によって未来を自分の手の中に入れようという脳の中の世界のことでしょう。自然の世界においては、未来なんてものは、天気予報一つにしても容易には当たるものじゃない。そういう何が起こるか分からない未来なるものを予言するのは、みんなの脳の中に入って統御しつくしてしまうという。そこでは完全に身体が抜け落ちていく。人間というものは、いくら身体から出発しても、最後はやはり脳の中に埋もれこんでいってしまうものなんだろうか。

山崎 国家というものは一種の幻想だけれど、武装化は身体化することもありますね。つまり、どんな幻想も現実を持ちこんだときには、当然身体化せざるをえない。芝居にしても、作者が作ったフィクションを、俳優が演じることで身体化していく。そうやってもう一つの現実として生きていく。ただ、これほどのフィクションを現実として生きるのには、僕ら演劇の側からするとほとんど不可能に近いわけで、そういう意味では、彼らは演劇を超えてしまったとも言えるかもしれない。それにしても、さっき布施さんがおっしゃったように、サティアンを作り化学装置を作ったというように幻想をどんどん現実化していったのは、頭の中で考えることはどうしても身体化する方向に向かう



からなんでしょうね。けれど、そこにはもう一つ契機があつたと、僕には思えるんです。麻原彰晃という人の歴史を追っていくと、彼個人はほとんど現実から一切否定され続けてきた。弱視だったことは見逃せない要素だろうと思いますが、盲学校で十五年間の寄宿生活を余儀なくされたことは、おそらく身体的なレベルで自分が否定されたこと、彼に感じさせた。彼が東大を受験したのも、身体的に拒絶された代償に、知的に認知されたいという欲望が、彼の中に出てきたからだと思います。

そこでも彼は失敗して、次は宗教に入っていくわけですが、どうしてそれが原始仏教だったのかというと、自分の否定されたからだをどこかで超えなくてはいけないと、彼はどこかで考えたに違いない。そう考えるとヨガから原始仏教への道筋もよくわかるような気がするんですが、「解脱」というのは、誕生から死において限界づけられている人間の身体を超えること、生と死を超えることですね。

そして、その一方で、現実の中でも彼は認知されたかった。その欲望が、宗教法人化することでオウム真理教を社会に認知させ、選挙に打つて出ることさらなる認知を迫ることになっていった。落選したときに、彼は選挙が票の操作を行ったんじゃないかと発言して、僕は半分冗談だろうと思っていたんだけど、いまから考えると、あながち冗

談でもなかったんじゃないかという気がしないでもない。現実に対する不信心は、彼の中でそこまで来ていたんですね。

そのあと信者を連れて石垣島に避難するあたりから、彼自身もかなり急展開していくことになるんですが、波野村の住民との対立にしても、ワイドショーなんかで報道された以上に、かなり激しい対立があったんじゃないかと想像できる。例えば、どこかの公民館を借りて集会を開こうとしたら、当日になってオウムだからダメだと言われる。しようがないから出向いて行って、麻原さんが自ら「なんとかお願いしますよ」と頭を下げたりしているビデオがいまごろになって報道されたりしているけれど、そういった報道しきれなかった対立が、各地で相当あったに違いない。そして、そういった現実を積み重ねていったとき、彼の前には現実の市民社会の壁が大きく立ち上がったんじゃないだろうか。宗教活動を展開していくためには具体的な場所が必要であるにもかかわらず、彼にとって市民社会は、結局自分を受け入れる余地を一切否定するということ発想が出てきて、不思議はないだろうと思うんです。そして、おそらくそれが、危機幻想を現実化しなければならぬところまで追いこまれた、直接のきっかけだったように思えてならない。もちろんこれは、僕の想像の域を出ない話ですが。

橋爪 いまのお話を私流に言い替えますと、出家の問題だと思っただけです。出家というのはご存知のように世俗社会と分離を図るわけですが、これにもいろいろな形があったり、インドの初期の小乗の出家であれば、毎日三度の飯を



在家の人からもらう。尊敬されながらも依存する、分離しながらも融合するというコミュニケーションとしての調和があったけれど、そういう形での出家を認める伝統は、日本にもなかったし中国にもなかった。やれば、ただの物乞いと混同されて、バカにされてしまう。

じゃあ、どうなったかというところ、一つは自力更生型の禅宗ですね。労働しているから偉いんだ、というわけですね。そしてもう一つは、出家者でありながら、世俗の人にとこまでも似ていく。最後は結婚までして、どこが出家者なんだかわからなくなってしまう。われわれは仏教を受け入れて尊敬しているように見せかけながら、実は出家そのものは拒否して、明治以降の仏教の墮落を招いてきたんです。

そんなところにオウム真理教が、個人的な努力によって身体の覚醒によるすばらしい境地を開くんだという本来の出家主義、修行主義を行使した点は、原則的でないへんよかったです。もしもそこに社会の支持があれば、在家者とのコミュニケーションを含む出家者の集団を日本の社会の中に位置づけることができたんだけど、それはかなわなかった。そんな中で彼らの出家主義を貫くためには、人間や財産を世俗の社会から奪ってくるしかない、ということになって、家族と連絡をとってはいけない、財産はすべて教団に寄付しろ、というような方針を極端に押しすすめるようになっていく。そういう独特な、反社会的だと社会から見られてしまうような出家の概念を根本にせざるをえなかったという点で、もともと潜在的には反社会的な集団だったとも言えますが、これほど大きな出家/在家の境界線を作ってしまったことについては、日本社会と彼らの教団の両方に責任があると思います。

さらに、全財産を寄付させるタイプの出家主義をとれば、出家者が絶たれた時点で、教団はたちゆかなくなってしまう。つねに拡大し続けていなければ、大勢の出家者の生活を維持できない。ワークして自己生産することに依存すれば、世俗社会と最終的に同じになってしまうからね。ところが拡大がなんらかの形で阻止されると、経済的にピンチに立たされることになるでしょう。そこで、世俗社会の常識を無視するようなやり方で、人間や財産を獲得していくことになる。拉致監禁も含めた、これが問題の発生源です。それに対して、社会は当然それなりの防衛措置をとるわけですが、その防衛措置はすべて麻原さんの教義の中に反映して行って、彼の世界観の中にもますます強硬な反社会性を深く根づかせていくことになった。と、このあたりは、あくまで私の仮説に過ぎませんが。

中沢 いえ、その通りだと思います。僕が知っているチベットの出家なんかは、息子がお坊さんになることを、家族も村の人もこそぞって歓迎してくれるんです。子供たちがより高い精神を目指してくれるというところに、バックアップを惜しまない。むしろ、食糧も進んで与える。

ところが、オウム真理教の出家は、そのあたりの社会の違いを、まったく無視していた。僕は彼らの出家修行を見たとき、レーニンの政策を連想したんです。レーニンは革命の初期には、子供は国家が養うんだと言っていた。親子関係というのは新しい人間形成にとってマイナスの部分だから、すべて絶って共同生活の中で子供をケアするという政策を出したんですね。しかし、実際に革命が進行していくと、そんなことは不可能だということがわかってきた。こんなにくさくさの子供たちを国家が養っていくことは、



とうていできない。そこで、やっぱり子供は国民がそれぞれの家庭で育ててくれ、ということになったんですが、麻原さんもまた、かなり早い時期から同じ問題に直面していたんだと思います。

問題を解消する方法としては、内部で農業をやり、食糧を再生産するやり方もありました。広大な土地があったんですからね。ところが、自己の中であらゆる形態の再生産を拒否した結果、農業も拒否して、パンの材料もラーメンの材料も、全部外から運ぶようにした。その結果、財産を持っているものを自己の集団の中に組み入れて収奪していくという解決策しかとれなかった。やっぱり彼は、レーニンにはなれなかったんです。レーニンならどこかでハッと気がついて現実的な路線に切り換えられたのに、麻原さんは気がついたにもかかわらず、自分の出家主義を強引に押し通そうとした。

オウム真理教の出家主義は世界にも類を見ないほど徹底したものであったんですが、それは一切の妥協を排除したからです。ただし、これは再生産を拒否し収奪のみに頼るということを背後で言っているのと同じことになって、麻原彰晃の教団が経済的に破綻していく最大原因になり、反社会的と言われる本質を作り上げていく基礎にもなった。

ただし、これはいろいろな側面を持っていて、日本人が出家に対して許容度がなくなると同時に、子供が家庭生活のスタンダードを超え、より高い価値を求めていくなんてことを、親が認められなくなってしまうという現実もあるんです。いまの親は、子供をいつも自分の範囲内に置いておきたがる。子供のほうも自分の出家は親から石を持って追われることだと痛感していますから、そこで関係は

ぶつり切れてしまう。前と違って、いまオウム信者たちは、家に帰ろうと思えば帰れるんです。ちょっと派出所に駆けこみさえすれば、簡単に帰ることができる。なのに、帰らないんです。それは、親が自分のやってしている行為を認

帰り道を持たない ハルマゲドン幻想

めていないということ、ひしひしと感じているから。教団が経済的に破綻したのも、出家した若者たちが心理的に破綻する状態に追いこまれたのも、オウムの出家主義がもっている現実性のなさが原因なんです。

山崎 新興宗教の事件ということで言えば、イエスの方舟の事件とオウムの事件は何が違うのかという問題があると思うんです。イエスの方舟の女性信者たちには家族としてや女性としてではなく、人間として生きていきたいという欲望があつて、そこでもやはり家族との対立が起きてきた。ところが、彼女たちの場合は、最終的には家族も彼女たちの要求を受け入れたんですね。彼女たちが家族を離れた個として生きることを肯定した。

それが、八六年に和歌山で起きた真理の友教会の集団自殺になると、もうちょっとラジカルになってくるんです。オウムとも通じるなにかがあると思うけれど、「神の花嫁」と呼ばれた七人の女性信者たちは、人間の身体というものはいとも簡単に超えられるんだということを証明してみせた。現実と呼ばれるこっち側の世界は自分たちの世界ではなくて、向こう側に自分たちの本当の世界はある。だから僕らから見れば死であつても、彼女たちにとっては解放になる。そして、そのことを、やはり彼女たちの家族は肯定した。彼女たちが個として生きようとしたことに對して、もう自分たちは何も言うことができないんだ、という形で

よってしか自分たちの経済活動をまかなえないということに、オウムを追いこんでいった。

それと、一般社会には、オウム真理教について回る超能力だとか神秘体験といったものに対するアレルギーがあつたと思うんです。けれど、ブームには必ず時代の根源的な欲望が隠されていて、オカルトブームにも脱身体に対する欲望が潜んでいるんだと読まれていけば、世間の対応ももう少し違う形になったんじゃないかと思えてならない。

中沢 僕は自分も密教をやった立場として、一つ気になることがあるんですね。それは、すでに捕まった中田清秀と井上嘉浩なんか、「私はグルを愛している」ということを強烈に言うことです。そういうた尊師との関係は、チベット密教におけるグルとの関係とはずいぶん違う。

麻原さんは弟子たちに対して、ものすごくサディスティックな面がありますね。次々に苛酷な修行を与えて、それに打ち勝てと言う。そうした過程でサディスティック・マゾヒスティックな関係が形成されて、二人の間に強固にエロチックな関係が成立していく。それはグルと一人ひとりの信者の愛情関係であつて、横の信者同士は競争相手になり、そこには嫉妬やねたみが発生しやすい。

チベットのグルと弟子の場合も、確かにまずは父親と子供の関係を作りますが、ある時期が過ぎると、それを解いてしまう。和尚ラジニシの教団でも、「師にあつたら師を殺せ」という禅の教えに従って、自分がある程度に到達したら、それまで従っていたグルを精神的に殺せと言うという。そうやって、成長した弟子を必ず解放する。

ところが、麻原彰晃は絶対に解放しなかつた。すると、出家した子供たちは強烈な父親との関係の中で、身動きが



受け入れたと思うんです。

だから、この二つの事件が社会的にもっと理解されていけば、オウム真理教ももっと理解されたんじゃないかと思えますね。ところが、オウムの家族の立場は、中沢さんも言ったように、家族を超えて個として生きることを理解しない、拒絶するという形で現われた。けれど、それに対して信者のほうは、家族を超え自分の身体を超えて生きるということが主題になっていきますから、マスコミがさかんに報道したような家族と信者との間の衝突は、実は起きていないんじゃないか、という気がしなくもない。

僕らの現実に戻って見ても、いまや三分の一の人間が男として女として家族の一員として生きていくよりも、個として生きていくほうを選びとっている。世俗的な現象としては独身主義やオナニー主義として現われているわけですが、そうした時代の流れの上に、オウムの信者もまた立っていた。そのことに彼らの家族の理解がもつとあれば、お布施の問題なんか、ここまでこじれずに解決できたんじゃないかと思えますね。そうした家族の態度が、お布施を強要する、あらゆる手段で出家者を増やすという手段にとれない状況になっていく。そして、修行に耐えることだけが精神的な成長だと考えるようになる。これは、上祐さんだろうが早川さんだろうが、みんな同じです。それを見て僕は、同じ密教でもオウム真理教はずいぶん違うな、と感じたんです。

橋爪 家族が集団主義で出家信者が個人主義だったという、確かにオウム教団のほうは個人主義的で近代的に見えますが、しかし、彼らが本当に個人主義だったかという、疑問が残るんですね。いまの中沢さんのお話からも、けつして個人主義的に行動していたとは思えないし、私が調べたり聞きにいたりした限りではあまりきちんとした戒律があるという感じでもない。もし厳密な戒律を持った出家集団であれば、おたがいが自由な出家者個人として対等に付き合えるわけですが、戒律が曖昧だとすれば、そうでない可能性が高くなる。

しかも、彼らが作った組織は、政府に似ているという話もありましたが、つまりは非常に普通の組織でしょう。そうした中で、パン工場だとか精密機械工場だとか自動車の運転手だとか、世俗の仕事と同じような仕事を修行として無給でやっていく。このワークという考え方は、おそらく厳密な密教の中にはないはずですが、聖職者が世俗の活動をするという点で似ているものを見つけるとすれば、イエズス会ぐらいでしょうか。ともかくも、彼らの官僚組織では、個人主義的な横の関係よりも、上下関係のほうが優先されてしまう。

そして、そうした官僚組織ができてしまうのは、彼らが目的合理的に行動しているのではなく、修行も日常の行動も上からの指令に完全に支配されているからですね。そん

な中で育まれるものが、はたして精神の成長と言えるだろうか。むしろ怠惰にさえ通じるようなはがゆい幼稚さ、他者への依存を、私はオウムの出家集団に感じてしまうんです。

中沢 神秘体験と言われているようなものは、大脳の前頭葉の働きをなるべく抑えていって内的な光が出たり、独特の快感を得られたりする。オウムではそうした体験をすることで精神的なステージが上がっていくと言っていますが、本来の密教のやり方では、それと意識的な思考と照らし合わせて、内側の神秘体験を照らししていく。そうすることによって、現実を一種のゲームとして扱うことができるようになる。苦しいことがあっても苦しまないとか、欲望に対しても執着しないとかね。

ところが、その場合、グルの存在というのは、ひどくアンビバレントなものになっていかざるをえないんです。グルが命令している限り、どんなに自分が内的体験によって自由な状態に入ったところで、グルとの関係からは脱出できない。密教がグルからの解放を条件づけているのもこのためなんです。この全体を余裕のあるゲームとして捉えていくという視点を、麻原さんは弟子たちに与えなかった。だから、オウム真理教の信者の人たちと話していて印象的なのは、余裕がないことなんです。真面目すぎてユーモアが足りない。今回の事態についても、上祐さんはこれは通り過ぎていく幻に過ぎないと言っていたけれど、例えば禅宗の坊さんや密教の修行者なら、そんな教科書的な捉え方はしないだろう。もともと、その真面目さがギョルには受けているわけですが。

山崎 僕も、基本的には麻原さんと信者の関係のあり方



がオウムの問題だろうと思っています。信者たちが絶対的に麻原さんを愛していたり、まったく疑いがかかったりするのには、麻原さんしか神秘体験をさせることができなかつたからですね。グルと呼ばれる存在がほかにも何人かいれば、教団としての性格はずいぶん違ったものになっていたはずだった。

それと、演劇でも俳優さんの中には、フィクションをもう一つの現実として、実際の現実よりもはるかにリアルに生きる人が出てくるんです。すると、公演が終わったあと、その人をどう現実に戻すかという問題が出てくる。

中沢 マインドコントロールを解くってやつですね。

山崎 ええ。「帰道」と僕らは呼んでいるんですが、この「行き道」と「帰道」が出入り自由の通路としてちゃんと強くないと、演劇でさえやばいことになる。宗教はもっと強烈ですね。恐山の巫女なんか、必ずそばに第三者がついていて、向こうに行き放しにならないようにからだをなでたりする。ところが、オウムの人々たちを見ていると、どうも行き放しになってしまっている。日常や合理的な思考に立ち戻るための通路を用意したうえで神秘体験をさせるという回路が、欠けているように思えてならないですね。

ハルマゲドンという幻想自体は、僕がかまわないと思うんです。ところが、それを直線的に現実の中に持ちこんでしまったのは、ハルマゲドンを現実の側から見た場合にどうやって相対化したらいいかという視点が欠けていたからでしょう。修行というレベルでもハルマゲドンの幻想という点でも、帰道というものを麻原さんはどこかで作りそこなっている。それが、すべてが一方通行にならざるをえ

なかつた大きな理由だという気がするんです。

布施 自分たちは現実にいると思っている人たちは信者の人たちに「夢から醒めなさい」と言い、信者の人たちは「あなたたちこそ醒めなさい」と俗世間の人たちに言う。つまり、両方で「醒めなさい」と言い合っているわけなんです。両方とも夢を見ています。でも、そこで本当に問題なのは、そもそも醒めるべき現実なんているのかどうか。僕らは彼らの外側において、「早く戻ってほしい」と言ったりしているけれど、じゃあ、戻ってくるだけですべてが解決するのかわかるとはなはだ疑問で、僕らだって違った形の夢の中で暮らしているだけなのかもしれないわけでしょう。

橋爪 本当にのめりこんでしまう俳優さんがいるという話は興味深いけれど、お芝居であれば少なくとも普通の俳優さんは、どこかでこれはフィクション（虚構）だということを意識している。でも、宗教の場合は、それは最初からフィクションではなく真実、現実以上の現実なんです。そして、どちらの人数が多いかは関係なしに、この二つの現実がまったく対等で、われわれの現実と彼らの現実のどちらがより現実なのか、決める手だてはない。

山崎 つまり、どちらも現実なんだ。だからこそどちらの現実も絶えず自由に入出入りできるように、自分とどちらでもない第三の場所に置いておくのが、僕はいんじやないかと思う。

橋爪 どちらでもない第三の場所なんてないと思います。二つの現実の間の自由な移動が可能であるなら、二つの異なる現実を同時に抱えるわけで、それは宗教にとつて



もわれわれにとつてもプラスにこそなれ、マイナスになるわけではないですね。

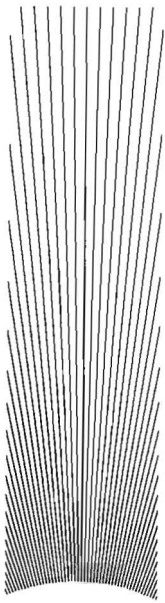
中沢 オウムの子たちが強制捜査で来た警官に向かって「地獄に墮ちるぞ」と言っていた様子は、むしろ可哀想な感じがしました。僕もチベットでは、地獄の修行をやらされたんです。山の中にたった一人素っ裸で入って、二十一日間にわたって六道の体験を行い、その中で地獄も体験するんだけど、寒冷地獄なら寒冷地獄の環境に、餓鬼なら飲み食いせずに、畜生なら動物そのものになってというように、周囲に対する自分の環境を六道のいろいろな場所に作り変えて、意識体というのは地獄にも餓鬼にも畜生にも人間にも自由自在に転生できる流動体なんだということを実感するための訓練を行うんです。人間という生命体の条件のもとでは人間が作り上げる現実がもっともリアリティのある現実として感じられるように、地獄という生命体の条件のもとでは地獄のリアリティだけが唯一の現実となる。しかしそういう地獄を体験することは、むしろ人間の意識を自由な状態にするためにあるわけで、「地獄に墮ちるぞ」と彼らが言うときの、単なる因果応報論とは違います。そんなの、「親の因果が子に報い……」じゃないけど、見世物小屋のレベルの話じゃないですか。そうした刷りこみを強烈に行っていくこともまた、オウムの子たちの意識やグルとの関係を歪めている、一つの大きな要因だと思えます。

橋爪 われわれのこの社会の現実とオウムの現実が権利としては対等であると、そして両方の現実を行ったり来たりすることができれば、密教的な意味で意識が解放されていまおっしゃったような世界が開けるといえるのはわかりま

すが、そのうえで私は社会学者として、やはりこちらの社会の現実性の権利上の優位性を主張したいと考えます。それは、より現実だからという意味ではなく、すべての人間が生きているのはとりあえずこの現実であり、オウム真理教が発したのもこの現実だから。その意味で、共通の立脚点だからです。それゆえに、もしこの社会の現実のルールに反するようなもう一つの現実を作った、この社会に攻撃を仕掛けたならば、この社会の法則性に従ってしかるべき出来事が起こる。この正常なリアクション（法的措置）については、彼らも認めるべきではないですか。

山崎 上祐さんもいま、そういう方向で教団を作り変えようという努力をしているようですね。

中沢 ただ、そうすると、オウム真理教が持っていた魅力もなくなっちゃう。僕はこの事件に対して、個人的にものすごく責任を感じているんです。その理由は、一つはなぜ麻原彰晃ともっとちゃんと付き合わなかったのか。九一年に対談で会ったとき、オウム真理教という教団はもうダメだと思って、付き合うのをやめてしまった。八九年にも対談で会っているんだけど、そのときはまだ麻原彰晃とい



編集部 それにしても、テレビや雑誌で見ている限りでは、麻原氏がなぜあそこまで弟子たちを強力にひきつけたのか、素朴に疑問が残るんですが。

中沢 一言で言って「野生」ですね。それと、「闇の深

はただの俗物扱いで、「麻原、修行が足りん」なんてスポーツ新聞に書かれたりしてますけど、そんなに単純な人間ではない。オウム真理教が開発した占星術は非常に優れているんですが、占星術班の子によると、麻原彰晃は海王星なんだそうです。海王星というのは、光が射さない。視力が及ばない世界であると同時に、太陽の光を浴びている他の惑星からはけっして理解されない暗さを持つ。そういう惑星が同じ太陽系の一員として回っていることが、若者たちを深く震撼させたんだと思いますね。そうしたものに、彼らはおそらく人生の中で初めて直面したんです。

だから、みんな麻原彰晃を「汚い、臭い、ブ男だ、いやだ」って言うけれど、そうしたデオドラント感覚のなさが、逆に若者たちにとっては魅力だった。便所がウジ虫だらけのようなどころで修行することに、幸福と解放感を感じていたんだと思うんです。

山崎 僕は、自己解体することの快感って、甘く見ちゃいけないと思うんですね。僕らは近代合理主義的なところで生きているから、枠組みのきちんとした自己に価値を置いているけれど、オウムの信者たちは自己が解体されていくときの快感を、おそらく身をもって体験したんじゃないか。

僕がやっている芸能も、いわば自己を解体させる作業なんです。フィクションを喜んで受け入れるということは、自分が解体されるのを引き受けるということ。それはたぶん、神秘体験での自己解体の仕方と、非常に似通っているんじゃないかと思う。そして、それは現代の若い世代が持っている根源的な欲望として、僕はきちんと認めてあげたい。



う人間も非常に頭がよくて、これはなかなか行けると感じた。ところが、九一年のときは例の選挙のあとで、彼はすごく暗かった。被害者意識を強く持つようになって、これはダメだと思ったんだ。でも僕がやるべきだったのは、麻原彰晃の高いプライドを突き崩し、彼を狭い密教の体験から解放してやることだった。

それからもう一つは、オウム真理教の信者の五分の一角は、僕の『虹の階梯』を読んでいることです。読んで、密教の修行をしたいと憧れていた。ところが、ニューアカデミズムが始まったりなんだりのいろいろな事情で、僕はその受け皿を作ることができなかった。そんな彼らが日本の中で修行をするために行ける場所といたら、オウム真理教しかなかったんです。

そして、そこへ入ってしまったら、麻原彰晃がたどるという人間であつても、グルへの絶対帰依を失くしてはならない。そうなった子供たちを前にして、僕は自分がやらなかったことの責任を、ひしひしと感じずにはいられないんですね。だから、僕にとってこの事件は、評論家のようにのんきな分析をすませられる種類のものではない。



麻原彰晃は 巨大な闇である

さ。信者の子たちと話すと、みんな言いますよ、「尊師は闇みたいな方だ。僕らは日常の中で、あんな深い闇を見たことがない」って。つまり、底知れぬ闇を持った野生のかたまりに、ドーンと来られてしまった。マスコミの報道で

中沢 麻原彰晃という人物についてももう少し言えば、僕は今回、彼がやった対談を全部読み返してみたいです。僕との対談、荒俣宏との対談、ビートたけしとの対談。そしてあらためて感心したのは、麻原さんはものすごくリアクションがいいんです。相手の言語のレベルを即座に見抜いて、的確に対応する。たぶん、彼に思想なんてものはなかったんだと思う。彼の盲目の世界の中にフツと出てきた人間の問題意識にリアクションすることで、自分をそれらしく見せかけていた。これは、優れたベテレン師の特徴でもありますね。

山崎 あらかじめ自己が解体してゼロになっているから、絶えず現象として対応できちゃうんでしょうね。その巨大さは、ちょっとすごいものがあるけれど、それと、いままでの新興宗教の教祖というのは、霊的な存在になってどこかに行くにしても、ある特定の歴史の段階なり場所なりにしか行けなかったんです。ところが、麻原さんは自在で、どんな時代にも行けるし、どんな場所に行くこともできる。ある意味で、これだけ解体された教祖というのは奇跡じゃないですか。

中沢 前世占いにしても、大川隆法がやると有名人の名前はっかりが出てくるんだけど、麻原彰晃の場合は世界史に出てこないようなことを言うんですね。あの自在さは、もしかしたら世界史の知識のなさのなせるわざかもしれない。そんなわけで、オウムの若い子たちに、それはやっぱり衝撃を与えていたと思います。

麻原さんがどうやって説教していたのか、若い子にいろいろ聞いたんです。そして、前の日に誰かを呼んで話を聞くんだったという。占星術の得意な子がいたら、星の示す未

来について聞く。化学の得意な子がいたら、化学兵器はどのような段階に来ているのかを聞く。そして、翌日講座に出てくると、「私はゆうべビジョンを見た」と言って、その話を使ってしゃべり出すわけです。前の日にしゃべった若い信者は「うーん、やられた」と思って聞いていたんだけど、その「やられた」の中身は、「尊師ってなんて頭がいいんだろう」だったりする。(笑)

布施 野生なり闇に魅せられて入っていくというのは、いまのお話でよくわかるんですが、実際に入ってみると、そこにあるのはやっぱり組織だったりするわけでしょう。

中沢 だから、みんな困っちゃうのね。ヨガの修行がしたくて入ったのに、とくに九三年以降に入信した人たちというのは、尊師の説法が兵器の話ばかりだった。「何しにここに来たんだろう」と思った子たちは、多かつたはずですよ。

山崎 ただ、例えば死について、いまは脳死や臓器移植の問題が出てきていますね。そうすると、いままでは人間は一瞬にして死ぬんだと思われていたのが、もつとゆっくりにいくつかの段階を経て死んでいくんだということがわかってくる。そのところをこれまでの宗教は説明してないかったけれど、麻原さんの場合は、四つのエレメントから人間は構成されていて、そのエレメントが一つひとつ分解され、残った魂がさらに分解されて、というように、科学と対応するように死が説かれていた。

生命の誕生についても、いまや科学はかなりのレベルまで解明が進んでいるでしょう。そうすると、人間の欲望は死の以後、あるいは誕生以前にまで、とめどもなく拡大されていってしまう。前世や超能力に対する関心が高いのも、そうでしょう。仮想現実がこの先科学的にさらに作られていく時代に、バーチャルリアリティに対応する身体というものも、僕らはどんなふう組織していけばいいのかわからない。おそらくは、人間の中で眠っているもう一つの身体感覚を目醒めさせることによって、それはかなわないんじゃないだろうか。

そういう意味から言っても、オウムの人たちが持っていた欲望は、もつと解明されるべきだと思えます。単なるカルトな欲望なんかじゃない、むしろ近代科学が生み出した欲望なんだ、社会全体に通底する欲望なんだという形で一般社会に返していけないと、オウムの事件は終わらないんじゃないかと思う。オウム真理教の教義は非常に古典的ですが、その古典的な宗教が、なぜいまの若い世代にとっては新しい主題として蘇ってきたのか、そのことをもうちょっとと真面目に考えようよ、と僕は言いたいですね。

布施 片道だけの通路というのは、中途半端なゆえにかえって悪いものになってしまう可能性もあるわけですが、バーチャルリアリティの場合は、最終的にはスイッチを消せば、確実に現実に戻ってくる事ができる。麻原氏の出口を作らなかった一方通行の通路は、このスイッチが消えるという感覚がわからなかったんですね。

僕たちが生きている現実の世界にしても、人間の脳が作り出した夢の世界だとも言えて、それが麻原氏の野生の前でパーツと崩れるというのは、別に間違ったことでもないと思うんです。問題は、その快感に縛られて、今度は出口のない夢の中に入りこんでしまうこと。いつでもスイッチを消せる、あるいは自由に夢の外に出られるという感覚をどうやって回復するかが、たぶん大事な点だろうと思うん



その現われの一つだと思えます。母親以前の自分はどんな存在だったのか。あるいは、死という身体がジャンプする瞬間を体験してみたい。だから、オウムばかりがこんな騒がれていますが、八〇年代に入って、ここにつながってくるような小さな事件はたくさん起きています。向こうの世界で生きていきたいと身を投げた岡田有希子も、彼女を追って、自分の中に眠っている超能力を開化させるために飛び降りた少女も、そうした時代の欲望をまさに体現していたんですね。

そして、僕の中でもはつきりつかみきれなかったそんな欲望を、麻原さんはきつちりとうまくつかんでいた。これはショックでした。本当なら演劇のレベルでそこに通路を通さなくてはいけないのに、先にやられてしまったという感じだった。

例えば、テンプルのわきを通ろうとしたときに、いまの若者は角にぶつかってしまおうとする。それは現実に対する感覚が後退しているからなんです。でも、その代わりに、もう一つの現実に対する感覚が、どこかで開かれているのかもしれない。だとしたら、そのもう一つの現実をどんなふうに表示していったらいいのかわからない。それがいまの演劇に与えられている課題だと思えます。僕は年のせいかわからないが、なかなか通路をつけることができないでいた。その点、帰りの道の問題はあつたにしろ、麻原さんは、なかなかうまく通路をつけていたと思うんです。身体を超えていく感覚を手記に書いていた信者たちは、ほとんどが麻原さんの論理に従って、霊的エネルギーを開発していったんですからね。

そして、もう一つ、バーチャルリアリティの問題もある

です。

中沢 バーチャルリアリティの場合は、それこそ簡単にスイッチを切ることができるけれど、われわれの現実に限定して言えば、今日も明日もおそらく年を取っても、同じような毎日が変わりばえもせずに繰り返されていくだけだろう。そんな中で、『完全自殺マニュアル』という、いざとなったら自分でスイッチを切ってやるぞという本が出てきたりしたわけですが、麻原彰晃のもとに集まってきた子たちも、やっぱりある種のスイッチの切り方を学ぶために出家したと言ってもいいに違いない。こうした事態について、橋爪さんはどんなふう考えているんですか。

橋爪 そうした問題を語るたびに、身体を超える欲望などをプラスに見る見方はもちろんあるんですが、私が好むのは、プラスよりはマイナスとして語る語り方なんです。つまり、現実感がどうしてこんなにも消えてしまうのか、ということなんです。現実から現実感が消えてしまえば、当然現実以上に現実らしい現実人間はひかれることになるわけですから、それが宗教ならば飛びこむし、夢ならば信じてしまう。

けれど、私はやはり、現実にはそれにふさわしい現実感が備わっていることが正常な状態だと思うんです。そして、いまは正常な状態からは、明らかに大きくズレている。

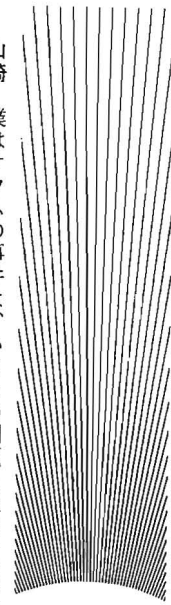
中沢 若者たちは、現実感はないくせに現実だと言っているもの、スイッチを切りたいわけですね。

橋爪 そうです。だけど、そこには矛盾があつて、現実というのは、スイッチが切りたくても切れないという持続性そのものの中にある。その持続性を引き受けることが実は現実の中身なんです。彼らは引き受けたくないわけで、

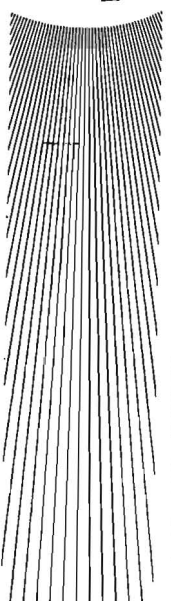


中沢 そうなんですな。

橋爪 なぜかという、面白くないから、あるいは、現実が自分のものではないような気がするから、理由はいろいろあるでしょう。ただ、いずれにしても、戦後と違って



オウムは現代社会を映す鏡である



もいい民主主義と言ってもいいのですが、われわれの生きていく世の中が、なぜ私の世代もつと下の世代の人びとに自分たちがすっかり生きていくべき世界として共通に了解されないのか、そのことが問題だと思っ

山崎 僕はオウムの事件は、いじめの問題と根は一緒だと思っ

僕がオウムには破局までのイメージしかなかったんじゃないかと言ったのは、いじめの子たちも現実に殺したあとから解放されるには、とりあえず死者を出して、そこに祝祭的な空間を瞬間的にでも作り出すしかない。オウムにしても、ハルマゲドンという幻想を行動に移すことによつてしか、この現実

中沢 オウムの若い子たちは、麻原さんにいじめられて、それを耐え抜くことによつて、ある瞬間パツと飛躍できた。村井さんのような初期からの信者と麻原さんとの関係はまた違いますが、それでも全体としていじめは一つのテーマになっているという点で、オウムというのは、どこからどこまでも現代社会の鏡なんだなあと感じますね。

橋爪 この社会はあらかじめ作られたもの、演出されたもので、自分は本当の登場人物ではない、という感覚は蔓延していると思

今回のオウム報道で言えば、これは犯罪に違いない、証明された事実だと、マスコミも信じているふしがある。で

も、刑事事件の嫌疑があるというだけで、原則的な民主主義のルールで言えば、「証明された事実」なんてまるでないんです。われわれの市民社会の手続きにおいては、裁判になつて法廷で検事と弁護士がルールに従つて争つて結論が出る。それ以上の追求の方法はないから、その結論をもつて事実としようという約束になっている。私はそれを支持します。しかし、その手続きもまだ始まっていない段階のいま、事実と言えるものは一切ないんです。にもかかわらず、オウムを犯人だと一斉に決めつけている状況は、自由のない学校の中でいじめが繰り返される状況となら変わりはない。このままでは、オウムを血祭りにあげたはずが、再びオウムが現われることになりかねない。もう少し自由度のある認識をもつて行動することが、この社会の作動メカニズムに対する信頼を取り戻し、子供たちもまたそれを信頼して、現実感のなさから人びとを解放する唯一の手だてだと思っ

布施 まずこの現実があり、そこから逃れたオウムの人たちがもう一つの現実を作り、その現実がマスコミによるオウムパッシングという、さらなるもう一つの現実を作っている。どれもこれもがひどく排他的であることも、一つの大きな問題だと思っ

それと、この社会の現実感のなさを、一番しみじみと感じているのはたぶんエリートで、それはそもそもエリートという存在自体が夢みたくいなものだからなんです。どんな大学を出たとかどんな会社に入ったとかはしよせんフィクションに過ぎなくて、いわゆる落ちこぼれた人たちに比べて、生の現実や身体性に触れ合う機会が極端に少ない。完全なフィクションの中



は、すでに完成した社会の現実の中で自分が新しいなにかを作り出す余地がないということではなく、やはり現実そのものが不愉快だということから来ていると思っ

橋爪 東大から出家したんです。(笑)

布施 いやいや。(笑) 大江健三郎は自分を「遅れてきた青年」だと言いましたね。その言い方の裏には、すでにできあがっていた現実はい

山崎 家庭内暴力というのは七〇年代の中盤過ぎから出てきたんですが、この現象を身体のレベルで考えると、自分の身体を自分の身体として獲得することに失敗した結果なんですね。最初は一方的に親から与えられた身体を自分のものとして獲得するための契機が先送りにされ続けた結果、そんな自分を築いた家庭に暴力が向かってしまっ

八〇年代に入って出てきた拒食症や過食症も、やはり自分の身体を獲得しそこねた、あるいは獲得することを拒否したところから始まった病理です。

得するための通路の与え方の問題は、現実のスイッチを切ることなしに若者たちが生きのびるために、これからも考えていかなければいけないんじゃないですか。

中沢 麻原さんの場合は、先送りにされてきた身体を、一気に入れたんだね。

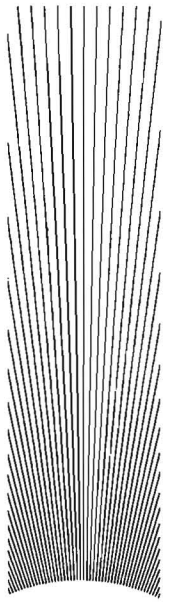
布施 ただ、そこで獲得される身体というのは、文明社会的なるものを全部落として原始の時代に帰る、という種類のものではないんですね。むしろ、文明やらテクノロジィやらバーチャルリアリティを一度くぐり抜けた果ての身体だろうと思う。例えば、飛行機に乗ったときの一気に移動する感覚は原始時代にはなかったもので、そうしたものを全部踏まえた身体が、はたして破綻せずに獲得できるのかどうか。もしかしたら、麻原彰晃の身体自身はなにかをくぐった果てにあるものではなく、原始の身体なのかもしれないという気もするんですが。

山崎 いや、そうではないでしょうね。論理的には霊的な存在になって一瞬のうちに移動できるというんですから、そこそ情報化社会が促している欲望です。そして、そうした欲望に対して必要なのは、「情報的な身体」ですね。その情報的な身体に通じる回路を、少なくとも麻原さんはなんらかの形で開いた。

ただ、情報的な身体と同時に「歩く身体」というか、日常の中で飯を食い、目的地まで歩かなくてはならないような、過去からえんえんと受けつがれてきた身体感覚も、僕たちは持っているんです。この二つの身体感覚にいかにより出入りできるかも、これからの課題の一つに違いない。超感覚というのは、やはりあるんだろうと思うんです。ずいぶん前に「広告批評」の編集部で清田益章くんが目の

いたりするわけでしょう。そこでは、子供の死という概念そのものがない。

山崎 だから、問題は、生について死について、僕らがこれからどんな文化を再構築していくかでしょうね。臓器



編集部

いじめの問題にしても、救いを求めている子供たちはたくさんいるわけで、そんな彼らを受けとめる受け皿がいゆる宗教的な装置以外にないとすると、そのこと自体のほうむしろ問題なんじゃないかと思うんですが。

中沢 僕は最近よく福岡に行くんだけど、千石イエスさんに会って「何してるんですか」と聞くと、「わしはもういじめのカウンセリングですわ」と言うのね。親に呼ばれていじめの問題をかかえた中学生のところに行つて、「バカヤロー」と相手がどなり散らすのをジッと聞き続ける。朝の四時ごろになって向こうの体力がなくなってきたところをガバツとつかまえて、「お前の問題はな」なんてやってるんだって。そういう子供をいま何人もかかえているらしいけど、やっぱりいまの問題はそこに集約されているんだということが、彼にはよくわかっているんですね。麻原

彰晃が子供たちに与えたものは、千石さんがいま直面している問題に対する、麻原なりの解釈だったんだろうと思うけど、やり方としては千石さんのほうが宗教じゃないし、人間が生きていくことに対するなんら幻想のないレベルで、自分の全体力、全存在をかけてやっているという点で、僕

前でスプーン曲げをやったとき、僕は身震いするほど感動しちゃったんだけど、それはやっぱりインキキだとは思えなかったからね。それと、臨死体験をした人を取材したことがあって、彼らは必ず超能力を獲得している。この五感を超える超感覚がなんなのか、科学的に解ければ一番いいんだろうし、いずれ解ける日も来るだろうけれど、大槻義彦教授のように非科学的だと決めつけて批判するのは、あまりに古典的というか――

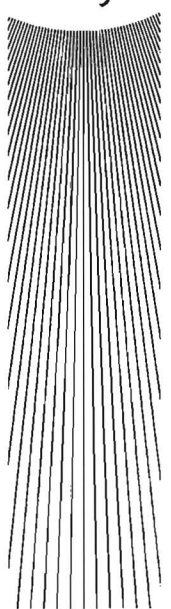
中沢 プリミティブですね。

山崎 ええ。人間の欲望はその先に行ってしまったら、大槻教授の答えでは、いまや誰も納得しないだろう。

さらに言うと、この先科学はどれだけ精巧なバーチャルリアリティを作り出さるか、という課題にも、このテーマは関わってきますね。バーチャルリアリティの世界を科学がほぼ完璧に作り出したときには、それはまさに超感覚の世界でもあるわけでしょう。とすれば、人間の身体の中にはやはり超感覚が眠っていたんだと、僕らは認めざるをえない。いまは宗教のレベルでのみ語られすぎているそういったものが、科学を通して解放される日がやってくる。中沢 そのことによつて、科学もまた変わっていくことだろうしね。

布施 死というのは瞬間ではなく、ある種のプロセスなんだという話が出ましたが、科学によつて生と死の境界が曖昧になったというよりも、そもそも生と死という考え方が人間の間で作られた概念に過ぎなかったのかもしれない。動物にとっては死なんてないのかもしれない。猿なんかは子供が死んでもミイラを引きずって一緒に暮らして

移植の問題にしても、これまでは個人に所属するものだったはずの身体が、そこでは社会に所属するものとして見直されている。いろいろな意味で、身体や生死に関する文化が大きく変わる段階に来ているんでしょう。



日本のジャーナリズムは死んだか

はより優れていると思います。

布施 宗教の役割は駆けこみ寺だという言い方があるって、逃げ場所としての駆けこみ寺は必要だと思いますが、オウムなんかの場合に問題になってくるのは、現実からの一時的な逃避所だったはずの駆けこみ寺自体が、また別の大きな現実になってしまふことですね。そうなるって、駆けこみ寺の駆けこみ寺を作らなくてはならなくなる。

中沢 昔の駆けこみ寺というのは確かに機能していたけれど、それは離婚とか借金とか犯罪を犯したとか、つまりどうにもならない法的問題を断ち切るための場所だった。でも、オウムにあるのは人間関係ですから、そこではある意味で外と同じ世界が繰り広げられている。

布施 駆けこみ寺だつても、そこもまた現実だったという。

中沢 どんな教団に入つたって、また現実が始まるのは同じですよ。ただ、昔の出家者や駆けこみ寺に駆けこんだ人間は、一個のちゃんとした人格を持って生きていた。だから寺の中でも大人としての現実を作っていたんです。オウム真理教の場合は、自立する以前の精神が麻原彰晃と



いうスーパーパパに出会って作られる、教団内の新しい現実の問題があるんですね。

橋爪 駆けこみ寺を作るなら、世俗の現実社会の真ん中に作って、家庭のオルタナティブとして機能させるべきでしょう。

中沢 かつては、日本人の知恵が、そういうものを社会の中に創出しえていた。

橋爪 ええ。その上で、その人間を家庭なり社会に返さないといけない。だから、オウム真理教の場合は、駆けこみ寺として機能していたと、私は認めたくないんだ。そこには家族を再建しようという発想はないわけで、少なくともわれわれが必要としている駆けこみ寺とは違うものだった。

山崎 ここで救済の問題が出てくるんだけど、オウムの初期というのは、基本的に自己救済だったと思うんです。あそこはコミュニケーションだと言う人もいるけれど、僕はそうは思わない。なぜなら、そこにあるのは麻原対自分という関係だけで、社会は形成されていなかったから。信者同士は、おたがい無関心だったと思うしね。そして、身体を超えるのが彼らにとつての自己救済だったということも、僕にはよくわかる気がする。

ただ、そこに人類救済の活動が加わってきたときに、僕はわからなくなってしまうんです。この救済活動というのは、ボランティアでしょう。ボランティアといえば、阪神大震災で若い世代が懸命にボランティア活動をやっていた。それを見て、あの子たちはかつてなら学生運動をやっていたらどうか、オウムに入ったら子ども学生運動が元気だったらそっちに行っただろうとか言う人たちがいるけれど、そんな

とで、そのためにもしかしたら彼はサリンの袋を実行部隊に渡すことができたのかもしれない。僕は、村井さんという人の精神の中で何が起こっていたのかについて、とても興味があります。

橋爪 救済というのは一面、非常に危険な考え方なんです。理由はいくつかあって、まず一番目に、救う者と救われる者が区別される。第二に、救われる者に対して、彼らは自分で問題を打開していく力がないんだと否定する。三番目は、救われた結果、救った者の世界に統一されてしまう。

中沢 うーん、まさに麻原彰晃だ。(笑)

橋爪 だからこそ、彼は人類救済を大きく掲げる必要があったんですね。個人レベルの修行では自分の身体の解放や成長を主題にしていながら、なぜそんな自分たちが外の世界からは疎外され、迫害されるのか、彼らの世界観の中では解釈がつかないんです。それを乗り越えて自分たちの世界観を成り立たせるためには、対立する相手をまるごと救えば(＝否定すれば)いいというふうになっていったんだと思う。

ただ、人類救済という考えに行きついたのは、やはり彼らに現実感が希薄だったからだと思えますね。にもかかわらず、相手を説得しようと思えば、規模を拡大しなくてはならない。幸い仏教には輪廻観がありますから、前生や後生まで視野に入れて、「地獄に堕ちる」と言えば、現状のままではいけないということが簡単に結論できる。空間的にも、ロシアを取りこめば日本を踏み越えて地球規模に拡大できるわけで、そのことによって日本の社会的現実を相対化する論拠を彼らは手に入れようとしたんじゃないか。



な考えはノーテンキもいいところで、学生運動とオウムやボランティアはまったく違う。

なぜなら、学生運動の基本はマルクス主義、つまり貧困です。それに対してボランティアは、豊かさが基本になっている。自分の環境を振り返ったときに、恵まれていてお金も余力もある。その余力をどこに回すかと考えたときに、ボランティアの発想は生まれてくるんですね。この両者のエネルギーの源は、まったく異なる場所にある。

オウムの場合を考えると、例えば青山弁護士は公害闘争をやっていたでしょう。おそらくその延長で、人類救済という主題に一步踏み出した。彼の踏み出し方を見ていると、明らかにボランティア的発想ですね。自分の環境の豊かさ、幸福を他人にわかち合いたいという意志を感じる。

ところが、ボランティアというのは対象がわりと限定されるけれど、人類救済となるとその限定が取れてしまう。全世界を救済するんだということになって――

中沢 逆に、どこの誰でもないことになる。(笑)

山崎 そう、ここから一気に現実性は失われていった。ハルマゲドンやサリンにまで、ストレートにつながっていったしまったんだと思うんです。自分を否定した現実を逆に一切否定し返そうとしたのは、麻原彰晃個人の欲望だったけれど、それを押し上げバックアップしたのは、実は青山さんのような人の人類を救済したいという欲望だったのかもしれない。

中沢 それは、村井さんが一番強かったんじゃないですか。村井さんは「なんでこんなことをやっているのか」と聞かれると、「人類文明を残したいですから」と答えている。彼の言う人類文明とは仏教文明、仏教的精神文明のこと。

そうやって現実感がなくなると、時間的・空間的に世界観を拡大していったことが、原始仏教教典からハルマゲドンに向かって大きく踏み出していく、一つの転換点になったんじゃないかと思うんです。

布施 もし彼らがサリンを使ったとして、一部ではサリンは不特定多数を殺すから、人類救済という抽象的な観念に合致した兵器だという言い方をしているんですが、僕ははたしてそうかなという気がするんですね。確かにサリンを地下鉄に置いて袋を破るまでは抽象的な世界ですけど、その結果死ぬのは具体的な個々の肉体でしょう。人類救済を完璧になしとげるためには、彼らの理屈に即して言えば、サリンは中途半端な武器でしかないかな。

中沢 おそらく麻原さんと村井さんは、もっともっと大規模なことを着想していたと思います。レーザー兵器の研究も実際はかなり進んでいたし、毒ガス兵器についても、サリンを何トン作るという以上に大きなことを計画していた。

今回は、ハルマゲドン未遂と見ていいでしょう。なぜこんなことになったかというところ、警察と公安が挑発したからです。そうでなければ、日本一國の問題ではすまないような巨大な出来事に発展していた可能性がある。つまり、早川さんの構想が現実化したら、十一月には東京中にサリンが撒かれ、福井の原発には外国からミサイルが撃ちこまれていた可能性がある。それを未然に防いだという点では、今回は日本の公安はよく仕事をしました。しかし、まだ事件のすべてが終わったわけではないし、それとオウム真理教への宗教弾圧とは、いっしょくたにははいけません。

布施 もう一步前の未遂のほうが、もつとよかったですけどね。サリンが撒かれる前だったら。

橋爪 松本の前は無理だったとしても、松本の直後に解決するのが、公安にとっては理想だった。

布施 僕は、オウム真理教というのは、「脳」という世界の中に入りこんで出られなくなった集団だというふうに見えています。人類教済という抽象的な観念も脳の中の話です。

そういう脳の世界を完成させるには、具体的なものの現実的なものがあつては、話のつじつまが合わない。サリンが中途半端な兵器だったという発言で誤解しないでほしいのは、核爆弾とかもつと破壊力の大きい兵器ならよかった、という意味ではないんですね。そうじゃなくて、そういう意味でこの集団が一番ふさわしい武器はなにかと考えると、それはもしかしたらバイチャルリアリティの機械とか人間の現実感覚をスラしてしまうようなメディアとか、そういうものなのかもしれない。誰の命も失われず、もしかしたら誰も気づきさえしないような。

それはもう脳の中だけの戦いなのです。もつとも僕はそういう現実感のない世界は好きではありませんが。

橋爪 自分が知らないうちに少しずつ現実がズラされていつのまにかまったく違う現実に移動させられてしまうなんて、これほど人権を冒瀆した話もないですね。

中沢 失礼だよね。

橋爪 現実というのは、自分で苦勞しながら組み立て選りまぜていく、自分の人生そのもの、人格そのものじゃありませんか。どっちの現実がいいかは自分で決めるものであつて、そのために場合によっては死も辞さない。それほ



ど尊敬のあるものだと思うんですよ。だから、それと気づかせずに現実が変えられるような手段があるとすれば、それに對してこそわれわれはもつとも反対してはならない。

宗教も、そんなやり方に頼らずに、まともな格闘の中で人びとを獲得していくなら、いいと思いますね。そうした宗教は、よりよい現実である可能性が高いから、現実と現実が争うというのは基本的にいいことです。それが争いにならずに、なにかの技術によってどちらかに決まってしまうのは、たいへんによくないことなんです。

中沢 あと、やつぱり衝撃だったのは、いまの技術をもつてすれば、オウム程度の人材でも、これほどのことができちゃうんだということ。

橋爪 規模だつて、せいぜい中小企業ですからね。

中沢 村上龍の『愛と幻想のファシズム』だつて、実現できちゃうわけでしょう。技術力というものがここまで容易に手に入るような状況にすでになっている、それを見せつけられたということは、今回の事件ですごく大きかったと思う。

編集部 最後に、今回のマスコミのオウム報道については、どんなふうにお感じですか。上祐元外報部長の存在がオウムの宣伝になると言つてクローズアップされましたが、結局は、全マスコミというか公安警察とオウムとの情報戦は、警察側が勝利したとも言える。こうしたやり方が今後のマスコミ報道にどんな影響を与えていくのか、というあたりを少しお話いただけますか。

中沢 サリン事件が起こつてすぐに、山崎さんが「これは日本人が日本人を殺戮した初めての事件だ」と発言して

いて、「おつ、これは」と思つたんですね。テレビにおける最初の一週間は、そのスタンスがあつた。ところがそれを過ぎたら、「オウムの内面を問え」なんてこと言つた僕なんかは、TV局に送りこまれる「非国民」のファックスとともに撤退を余儀なくされ、代わりにオウムウォッチャーと言われる人や宗教ジャーナリストと名乗る面々が、画面を占領するようになった。すると、たちまち「うわあ日本だなあ」という感じになつたんです。プロレスになつてしまつた。登場人物はほとんど同じで、組み合わせが代わつて出てくるだけ。初めのころは肌身に感じられた異質な外部が、そうやって日本の内部の問題に納められてしまつたんですね。

山崎 僕なんかは事件が起きたとたん、日本人あるいは日本国家のアイデンティティに亀裂が入つた初めての事件だと感じて、なんとかそれを拡大しなかつた、世界の問題にまで持ちこみたかつたんだけど、オウム批判の嵐の中で、おそらく意図的に日本の国内問題に収斂されていつたと思う。

同じ批判するにしても、本当にやらなくてはならなかつたのは、米ソの対立構造を自分たちにスライドさせた世界の読み方や革命のやり方だつたと思うんです。そうでなければ、オウムを批判したことにはならない。それなのに、オウムウォッチャーたちがやつたのは、オウムをオウム対市民という対立の中に置いただけ。でも、それじゃ麻原さんが自分をアメリカと対立させたのと、パラレルな図式じゃないですか。

中沢 一言で言うと、正義の対立ね。麻原彰晃はスピリチュアル正義だし、オウムウォッチャーは市民倫理の正義。



山崎 まあ、これだけオウムを叩くことによって、波野村で何が起つていっているのがよく見えてきた。日本の市民社会の段階がどこにあるかが実によく見えてきた、ということはありませんか。

橋爪 私が感じたのは、マスコミのあまりのだらしなことです。まず市民がいて、市民の生活を守るためには、警察や公安を含めた権力もある程度必要です。ただ、権力というのは魔物ですから、そこから独立するものはなるべくたくさんあつたほうがいい。その一つがジャーナリズムです。言つてみれば、権力とジャーナリズムは天敵なんです。だから、犯罪報道に関してジャーナリズムが権力の情報をたれ流すなんていうのはもつてのほかで、真実を別の規準によって追究していこうというスタンスがなくてはいけません。ところが、今回の報道では、情情的に権力に敵対しているというポーズはあつても、情報源という点では、ジャーナリズムはただのもらい屋でしかなかった。

中沢 ウォーターゲート事件のときのようなジャーナリストは、まず一人もいなかった。

橋爪 現在のように公式発表はなしで、捜査官の個人的なリークしかないというところでもない状況で紙面を作ろうというなら、クオリティペーパーは「真相は不明です」と言つて、オウム報道をほとんどしちやいけななんです。紙面は真っ白でいい。ガセネタを含めたりク記事を載せるのは、三流紙の仕事なんです。そうしたクオリティペーパーが一紙もなかつたことに、私は深い失望を覚えまして。まあ、それよりなにより、捜査する側が適切に情報を公表しないという点が、一番責任が重いんですけど。

中沢 湾岸戦争と同じことをやっていますね。

おまけ

オウムに関心薄い大学祭

いま真っ盛り
の大学祭で「オウム問題」を取り上げた企画が、あまり見当たらない。

一九九一、九二年の大学祭では、麻原彰晃被告が東京大学や京都大学など八つの大学で講演をして、盛況だった。大学で専門知識を修めた人たちが犯罪にかかわったことや、若者がオウムに引き寄せられることなど、大学祭は「オウム問題」を考える格好の場となっても良さそうなのに、学生たちの反応は、どうも鈍いのだ。

オウム側の刊行物によると、過去、麻原被告が講演したのは東京、京都、東北、信州、横浜国立、大阪、千葉、東京工業の各大学だ。これらの大学で今年、一連の事件を踏まえ、オウム関連の企画を行ったのは東北大だけだ。

京大の大学祭実行委員会が、「講演会は四つ主催するが、京大生の関心や意識を反映しようとしたもので、時事的なテーマを扱わずにはない。特定の宗教にかかわる講演を取り上げようという意見はなかった」と

説明する。東大もオウム関連の企画はない。「オウムには興味があります。でも、くだらない、と流しちゃう人も多い。事件がちよと渦中にあるから、冷静に考えるにはもうちょっと見たいなっと思っています」。十一月下旬に開く「駒場祭」委員会のメンバーはそう話す。「社会に関心がないわけじゃないんです。でも宗教性に触れた。

橋爪 さらにつけ加えるなら、公安は今回、明らかに宗
教弾圧を行っています。オウム真理教だからということ
で、バカバカしいような理由で逮捕するのは、狙い撃ちして
いるということですから。もし犯人の検挙と事件の再発防止
のためにどうしても微罪適用をしなくてはならないとした
ら、その判断と責任は現場でなく、公安の総括責任者が首
相まで行くべきなんです。首相がそういう判断をしている
ことを明らかにし、「緊急事態である。ガマンしてくれ」と
言っていて、事件の解決にあたる。そして、犯人が捕まっ
て裁判が始まった時点で、いままでの状態は異常だった、つ
いては私の進退も含めて国民に下駄を預けると言っていて、国
会に特別委員会を作って自ら喚問に応じる。そのさい関係
者は全員どういう捜査をしたか、国会で証言する。という
ような態勢を作らない限り、日本はダメになるでしょう。
だけど、そんなこと、誰もしていませんね。権力もジャー
ナリズムも、そういう意味では緊急事態にまったく作動し
ていないんです。

中沢 本当に、日本のジャーナリズムは死んじやったの
かな、という印象を受けましたね。これからどうやって立
ち直っていけばいいんだろう。
橋爪 立ち直りようもないくらいダメですね。自覚もな
いし、昔の言い方で言えば、三等国どころか、四等国、五
等国になり下がった。
布施 ジャーナリズムで取り上げられた情報でいえば、
結局一番インパクトがあったのは、テクノロジとか科学
とか現実の大量の薬品や機器だったでしょう。日本という
国が経済とテクノロジが優れているがゆえに世界的にな
れた、その事実がそのままオウムにも集約されているわけ



ですが、そこでは広告や文化は無力で、テクノロジや経
済に押し潰されてしまっている。この国で広告や文化がも
う一度復活できる日が来るんだろうか。
中沢 広告的という点で面白かったのは、マインドコン
トロールというものをみんなに認識させたことでしょう。
これは、日本人の意識をかなり変えたと思う。むしろ麻原
さんが望んだことを実現した形ですが、日常の現実という
のは無数の謀略とマインドコントロールの集合体でできて
いるということ、テレビニュースはみんなに見せてしま
った。

一九三〇年代のヨーロッパでも、陰謀というものがどう
もあるらしい、それは共産党がやっているといるらしいとい
うことで、マインドコントロールのことも含めて、ずいぶん報
道されたんです。そこにナチスが登場して、それを逆手に
とってファシズムを拡大していった。そういう意味で、
いま日本人は、かなりアブナイところに来ていますね。
山崎 かなり選択を迫られていますね。ただ、普通の主
婦なんかは、けっこう醒めてるのが救いでした。
中沢 若い子のほうがより醒めてる。
山崎 あんなにバカバカしく騒いでいたのはマスコミだ
けだった。

中沢 しかし、オウム問題は、この先十年ぐらいかけて
ジワジワとボディブローが効いてくる問題ですね。
橋爪 もっと効くかもしれない。
中沢 オウム真理教はまさに日本という国家のパンドラ
の箱を開いてしまった。この問題に真剣に対峙しない思想
は、二十一世紀を生き残っていけないでしょう。
(5月23日赤坂にて)